

就労を支え続けて 職能開発センターが40周年

東京・四谷の日本視覚障害者職能開発センター（片石修三理事長）は、9月26日、創立40周年記念全国ロービジョン（低視覚）セミナー『技術の進歩と日本視覚障害者職能開発センターの40年』を開催した。ウェブ会議サービス Zoomを通じて全国から290人がアクセス、同センター内でも講演者・関係者ら40人が参加・視聴した。松井新二郎の設立した日本盲人職能開発センター（当時）が、身体障害者通所授産施設「東京ワークショップ」（現在は多機能型施設）を開設したのが昭和55（1980）年のことだ。（本誌）

松井新二郎による職域の開拓

松井新二郎は大正3（1914）年、甲府市生まれ。日中戦争に従軍して両目を失明、軍事保護院の失明傷痍軍人寮を経て、日本大学で心理学を学んだ。山梨学院大学講師、山梨県立盲学校校長事務取扱、国立東京光明寮（国立東京視力障害センターを経て、国立障害者リハビリテーションセンターの前身）厚生教官、相談室長などを務めた後、視覚障害者の新職業開拓を目指して、昭和38（1963）年に日本盲人カナタイプ協会を組織。「カナタイプ無料貸出事業」「愛盲タイプ1000台整備運動」などにより、「カナタイプライター」（カナタイプ）の普及に尽力した。

昭和51（1976）年に、同協会を「日本盲人職能開発センター」と改組して社会福祉法人認可を受けた。昭和55年、録音カナタイプ事業が日本初の身体障害者通所授産施設の認可を受け、「東